

---

# 壺師ノ花

和日和

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

壺師ノ花

### 【Nコード】

N8024F

### 【作者名】

和日和

### 【あらすじ】

何に対しても、無関心な俺。ある日、事故に遭いそうな黒猫を助けて…。ギャグマンガ日和の天国組の捏造小説。

## 【巻】道路の真ん中、黒猫（前書き）

＊この小説は、ギャグマンガ日和の天国組（閻魔& a m p; 鬼男）の捏造小説です。

又、某サイトで載せている小説でもあります。

＊腐要素を入れるつもりはありませんが、嫌悪感を抱いてしまいそうな方は、閲覧をご遠慮下さい。

＊ギャグマンガ日和、天国組を愛してるっ！という同士様は、大歓迎です。

## 【巻】道路の真ん中、黒猫

『ニャー』

小さく声がした。

それは、尾の先に蝶々結びのリボンをつけた黒猫だった。

道端にいれば、皆、撫でたり抱き上げたりするかもしれないが、コイツがいる場所が問題だった。

車道に敷かれた横断歩道の上だ。

しかも、歩行者用信号が、青く点滅を繰り返している。

おまけに、止まっているトラックの運転手は、その猫に気付いていない。

歩行者たちは、それに気も止めることもなく、それぞれの行き先へと流れていく。

ただ俺だけが、その状況を眺めていた。

行く宛てもなく、立ち止まり、ただずっと――

――ふと、黒猫と目が合った。

真っ直ぐに俺を見るその眼は、黒毛によく栄<sup>は</sup>える黄色をしていた。

俺は、妙にその目に惹き付けられていた。

そして、次の瞬間――…

――…ドン！――…

俺は、黒猫を腕に抱き、道路の真ん中に倒れていた。

己の赤で染まる固く黒い地面と、薄れ揺らぐ白い視界の間で、黒猫の鳴き声を聞いた。

それと同時に、俺は意識を失った。

## 【弐】気が付けば、そこは

最初に取り戻した感覚は、聴覚だった。

『旨そうな人間の匂いがするぞ。』

そういう声だった、気がする。

その声と言葉は、あまりにも現実味に欠け、日常での言葉には全くない、獲物を狙う獣の気さえした。

一体、俺はどうなってしまったのだろう。

ふいにそう思い、目を開け、俺は全身の血が引いていくのを感じた。

視界に広がる全てが、恐怖そのものだった。

意識を失う前までは、青く嫌なほど白い雲があった空が。

今では、燃えるような赤と、黒く澱んだ雲によって、支配されている。

先程は気にも留めていなかった風ですら、ねっとりまとわり付き、より一層、恐怖を駆り立てた。

しかし、それだけの変化なら、まだ冷静さを保っていたかもしれない。

―ある『モノ』が、俺をより深い絶望に突き落とした。

その『モノ』は、俺の前に立ち、視界に暗い影を落とす。

それは最初、自分と同じ、人間のものと一緒のように思われた。

だが、俺は人間の影とは異なる部分を見つけてしまった。

髪の中から、尖った角が二本生えていたのだ。

それに、人間にしてはごついがたいをしている。

妙に、体が赤いのも気になった。

腰には寅柄の布を巻いているし…、これは俗に言う『鬼』というヤツだろうか。

―と、鬼は、その獣の如き眼で、俺を捕らえて言う。

「お前か？　こんな旨そうな匂いをさせているのは。

…しかし何故だ？　お前は、俺と同じ『鬼』だろうか？」

―意味が分からない。

俺が『鬼』…？

俺は『人間』だ。



ふいに俺は、髪に触れてみた。

するとどうだ。

こつりと、指に当たる物がある。

硬く、尖っている。

これは…

紛れもなく、俺を『鬼』と呼ぶ証拠だった。

―急に、逃げ出したくなるような衝動に駆られた。

嘘だ…！嘘だ嘘だ！

俺は、既に走り出していた。

俺が『鬼』なんて、そんなこと、信じない…！

何処に行くかも宛てもないのに、俺はただ足を前へと動かす。

ぬかるんだ地面がまとわり付くが、構っていられる暇はない。

先程の鬼が背後から追って来る。

おまけに、仲間と思われる鬼達も追って来ていた。

――…ガクン…！

次の瞬間、視界が歪んだ。

どうやら、急ぎ過ぎて気付かなかった石につまづいてしまったらしい。

そして俺は、地面に倒れ込んでしまった。

後ろには、鬼達が既に追いついていた。

その内の一匹が、俺を掴まえようと手を伸ばす。

もう…

もう…駄目なのか…！

俺は、思いきり目を閉じた。

この現実から目を背けるように、俺は恐怖でいっぱいだった。

と――…

「ニャー」

気の抜けるような、猫の声がした。

これ、何処かで聞いた気が――：

俺はうつすらと目を開けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8024f/>

---

壺師ノ花

2010年10月9日11時28分発行